

日本古典文學大系 54

歌舞伎脚本集

下

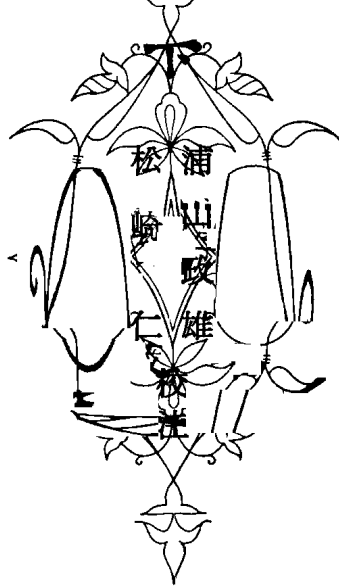
松浦  
崎山  
政雄  
仁雄

校注

岩波書店刊行

日本古典文學大系 54

歌舞伎脚本集



岩波書店刊行

昭和 36 年 12 月 5 日 第 1 刷 発行 ©  
昭和 51 年 5 月 25 日 第 13 刷 発行

定価 2100 円

校 注 者      うら      やま      まき      お  
                 浦      山      政      雄  
                 まつ      ざき      ひとし  
                 松      崎      仁



発 行 者      東 京 都 千 代 田 区 一 ツ 橋 2-5-5  
                 岩 波 雄 二 郎

印 刷 者      東 京 都 青 梅 市 根 ケ 布 1-385  
                 白 井 倉 之 助

発 行 所      東 京 都 千 代 田 区      株 式      岩 波 書 店  
                 一 ツ 橋 2-5-5      会 社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

解説	三
凡例	一七
名歌徳三舛玉垣	桜田治助作 三
お染久松色読販	鶴屋南北作 二九
小袖曾我薊色縫	河竹黙阿弥作 三三
補注	四八
歌舞伎用語	五三
付函	五七



## 解説

### 名歌徳三舛玉垣

初代桜田治助(一七三四—一八〇六)は、宝曆から文化初年に及ぶ歌舞伎の全盛期に、約半世紀の作者生活を送り、江戸の狂言作者界の第一人者であった。

江戸本石町の薪炭商の家に生れ(桜田門外久保町の生れともいう)、津村清藏に入門した治助が、田川治助の名で番付に現われたのは、宝曆七年七月の市村座で二十四歳である。同年十一月からは堀越二三治の下で津村治助と名乗り、翌八年十一月の森田座で桜田治助と改めた。同十一年六月、市村亀藏(後の九世羽左衛門)に付随して上京し、三年余を京都の芝居で修業、明和元年十一月東帰して森田座で立作者となった。以後、文化三年六月二十七日七十三歳で没するまでの四十余年間に百以上の脚本を書いたが、そのうち伝存するものは零本を加えても二十余種に過ぎず、評判記その他の傍証により窺い知るものが多い。それらによって彼の作を、顔見世狂言・會我狂言・その他に分類すると、総数はほぼ三・三・四の比率を示す。顔見世狂言に「男山弓勢競」(明和五年)・「御撰勸進帳」(安永二年)・「大商蛭小島」(天明四年)・「為朝躬親執」(寛政十一年)・「名歌徳三舛玉垣」、會我狂言に「江戸花陽向會我」(明和六年)・「国色和會我」(安永七年)・「劇場花万代會我」(天明元年)、その他に「伊達競阿国劇場」(安永七年)・「忠孝兩國織」(寛政二年)・「幡隨長兵衛精進組板」(享和三年)など名作が多い。また浄瑠璃・長唄の作詞にすぐれ、約八十種のうち、常磐津の「戻鷲色相肩」(戻鷲)・「命懸色の二番目」(雷のお鶴)、富本の「十

二段君が色音」(十二段)・「道行瀬川の仇浪」(おはん道行)・「新曲高尾懺悔」(高尾さんげ)・「花川戸身替の段」(身替お俊)・「道行念玉蔓」(長作)・長唄の「教草吉原雀」(吉原雀)・「我背子恋の合榎」(蜘蛛拍子舞)など現行曲も多い。

治助(俳名左文)の出世作「男山弓勢競」で、「左交丈狂言を出かされ、毎日早朝の大人」(役者千鳥原位指)と評されて以来、「是は桜田治助の思い付にて」(「役者花鼎」)、「左交丈お手柄」(「役者有難」)など讃辞が絶えないのは、先輩作者によって固定された江戸歌舞伎の形式を踏襲しながらも、絶えず目新しい趣向を豊富に盛り込むことに努め、五世市川団十郎・四世松本幸四郎ほか多くの名優を巧みに運用して、観客の好みに投じたからである。毎夜吉原に足を踏み入れたという彼の通人趣味は、彼の作に遊里情調を類出させたが、その機智に溢れた洒落や警句は、セリフや歌詞はもちろん、番付の語りや割書にも随所に見られる。しかして彼の大きな功績は、「劇場花万代會我」で一番目・二番目の筋を分離し、二番目三日替りの趣向を建てたことで、世話狂言としての二番目名題を独立させる機運を作ったものとして特筆に価する。

## 二

「名歌徳三舛玉垣」は、享和元年(一八〇一)十一月一日より河原崎座で上演された顔見世狂言である。

顔見世狂言は、毎年十一月を起点として更新される座組の披露が主眼であるが、江戸歌舞伎では芝居の正月として特に重要視された。まず「世界定め」が儀式として九月十二日に行われ、顔見世狂言の世界が決定する(世界については上巻解説七・八頁参照)。次に立作者の立てた筋書に従って、三枚目以上の作者が定められた受持の幕を書くが、主要な幕は立作者が受持つ。顔見世狂言の形式は、一番目が時代、二番目が世話であること、一番目三立目(序幕)または四立目に、「暫」「だんまり」「所作事」の場を設けること、大詰を金襴の御殿にすること、二番目は世話屋台で、雪降り、夫婦喧嘩や長屋騒動があり、幕切れ近く主な登場人物が本名を名乗り、時代に戻って終ること、大切は所作事にする事、また顔見世には狐を登場させることなど、いろいろの約束があった。こうした枠の中で、人気役者を盛り立てる趣向の面白さが要求されたが、筋の荒唐無稽は問題にならなかった。

さて、「名歌徳三舛玉垣」は「御位争いの世界」である。この世界は、宇治加賀掾正本で近松の作ともいわれる古浄瑠璃「惟喬惟仁位靜」(天和元年)に、小野小町に関する伝説を題材とした戯曲が混入して形成されている。治助はこの世界を、「娑花雪黒主」(安永五年)・「小町村芝居正月」(寛政元年)・「菊相撲爵定」(文化元年)の三作でも扱っているが、惟仁方が立役で、五代三郎・般若五郎・孔雀三郎らは荒事師か捌き役、小町は立女方、四位少将は若立役、惟喬方が敵役で大伴黒主・閨寺の婆は実悪、という役所は共通している。

梗概。三立目(二八頁) 惟仁親王は角力・競馬の勝負の結果兄惟喬親王を越えて皇位を継ぐこととなったが、白癩の病にかかり、その病平癒のためには巳の年巳の月巳の日巳の刻誕生の女の生血が必要である。大伴山主・伴健宗・師方・秀則らは神靈・神鏡を奪い、早魃を招いてこれを惟仁不徳のゆえと言立て、惟喬を擁立しようとしている。これに対して惟仁方の小野良実らは心を砕く。惟喬方は神泉苑で即位の式を挙げようとし、これを止めようとした良実らの命が危くなつた時、般若五郎が「暫く、暫く」と現われ、敵役を抑えて神鏡を取返す。惟喬と見えたのは芝居茶屋の下女おさんであった。四立目(八〇頁) 三立目で惟仁方が奪った惟喬方の密書は、牛飼駄六、実は健宗に奪回され、さらに惟仁方の孔雀三郎の手に入る。一方、四位少将宗貞は宿直の夜神靈・神鏡を盗まれたため、仕丁次郎又となつて詮議しているが、惟仁の不徳の汚名をすすぎ、わが罪を償えと告げる。諸国を廻る謀叛人大伴黒主は、衣笠山中において、かつての叛逆者橋逸勢の調儀を持った順礼に出逢う。五立目(一六六頁) 染殿後の御殿で雨乞の歌合せが行われ、雨降らば惟仁、雨降らざれば惟喬の即位という瀬戸際になる。神靈詮議の日限も今日一日に迫っている。強慾な玉垂婆は、お力を巳の年月日時揃った女として良実の臣五代三郎に売り付けるが、お力は名虎の魂魄の導きによって雨乞の名歌を詠じ、雨は沛然として降る。お力は小野の養女小町姫となる。しかし惟喬方はその歌に入筆して調伏の歌と認めるので、小町が短冊を洗うと入筆の文字は消える。五代三郎が玉垂婆こそ巳の年月日時揃った女であることを見抜いてこれを斬ると、神靈は婆の懐から現われ、その生血によって惟仁の病は平癒し、皇位を継ぐこととなる。

この台帳は二番目が欠けているので、「花江都歌舞妓年代記」の記録を「江戸芝居年代記」で補って引用する。  
靱負之助三津五郎、山主竜蔵を殺す所あり、助六意休の仕内なり。夫より吉原俄の所、女形大勢芸者の出立花やかに、茶



屋廻りでんぼうの吉荒五郎、芸者琴野団三郎、お福の面神女の所作あり、吾妻太夫羽織袴にて立ながら語る。都て俄の趣向なり。巫鈴俄振袖。後に八十島大尽実は五位之助義頭団蔵、千代鶴屋の傾城在原実は藤の森の小女郎狐桑三郎、廻国修行者蟠竜実は大伴黒主白猿、三人の出合。四立目の物語あって、団蔵鏡を差出す。狐の面鏡へ写る所大でき大評判。当顔見世三座壺番の大当り也。

しかし、この顔見世が開くまでには次のような経緯があった。「歌舞伎年表」より引用する。

役者無人、男女蔵病氣にて、興行にこまり、座元(注 河原崎権之助)は元祖栢庭(注 二世団十郎)伯母の血筋。桑三は白猿を伯父と敬ひ、常々大切の中故たのみし也。金主豊島や十右衛門、蜀山より添状を貰、座元、桑三郎、藤七、団三郎外四人にて白猿を訪ひ、団蔵其為上坂せずといひければ、再勤を聞入れしと云。山本北山、荒五郎を名題にせば金主となるべしとて、其通りにし、団蔵、白猿出勤する事となりてより、意外に金主も出来し由。

かくて、十二月十七日まで打続けたが、その他、団蔵と白猿が互に座頭を譲り合い、結局団蔵がスケに廻ったこと、四立目のだんまりに両人の顔合せの人氣がすさまじく、見物のどよめきが静まるまで、両人が互いに挨拶を交して、代る代る睨んで見せたことなど話題が多い(なお、このだんまりは天保八年正月市村座で再演され、七世団十郎の海老蔵が六部、五世団蔵が順礼、岩井杜若が狐であった。杜若は本作の桑三郎である)。六十八歳の治助も両人の出演で張合のある筆がとれ、大名題も兩人を三升の玉と見立てて名付けたという(「戲場年表」)。三立目の「暫」、四立目の「所作事」と「だんまり」、大詰の金樓の御殿、狐が出ることまで典型的な顔見世狂言だが、趣向として、前作の「小町村芝居正月」では、一番目三立目に関寺小町と清水小町、四立目に草紙洗小町と通小町、五立目に鸚鵡小町と兩乞小町、二番目に卒都婆小町を配したのに対し、この作では、五立目一幕に、卒都婆・兩乞・草紙洗・鸚鵡・関寺などの趣向を手際よくまとめている。

「暫」が歌舞伎十八番の一として、独立した狂言名題となり、役名や演出が固定するのは、明治になってからである。江戸時代にあつては、「太刀下」といわれる立役・女方の一群が、「ウケ」と称する悪公卿の命でまさに斬られようとする時、「暫」と声をかけて現われ、敵役を取拉ぐ荒事芸の類型の意味で、役名も演出も種々様々であった。また「暫」とはその

強力な人物をも指した。「役者一口商」(文化二年)ではこれを真・行・草に分類しているが、本作は、「暫」の方は真だが、「ウケ」が草である。寛政三年市村座の顔見世で見せた、三世瀬川菊之丞が見物の娘の姿で客席から現われ、敵役に頼まれて金冠白衣のウケを演じ、舞台で再び見物の娘に戻る趣向の踏襲で、文化十二年河原崎座の顔見世で二世中村大吉により再演されているが、珍型の一つである。しかし「暫」のつらね、鯉坊主以下の「引立て」などは標準型と言える。

### 三

底本は国立国会図書館所蔵の三冊本。半紙本で一頁九行、初演台帳の写本であるが、第三冊に二個所の錯簡があるのを発見し訂正した。「徳川文芸類聚」第六巻の翻刻(以下「徳川本」と略称)も同じ錯簡があるので、同系統の写本からの翻刻であることがわかる。底本・徳川本ともかなり誤写があるので、照合の上、参考となる差異を頭注欄に示した。なお、四立目衣笠山の場は、「花江都歌舞妓年代記」(以下「年代記」と略称)とも照合した。

### お染久松色読販

#### 一

四世鶴屋南北(一七五五—一八二九)は江戸日本橋で職人の子に生れ、安永五年見習作者となり、同六年より桜田兵蔵、同九年より沢兵蔵、天明二年より勝俵蔵の名で、作者として長い下積み生活が続けた。彼の活躍期は文化初年に始まるが、立作者の地位を確立したのは文化五年、五十四歳の時である。しかし、以後約二十年間は文字通り江戸作者界の第一人者として、化政度を代表する作の数々を発表することとなる。文化八年四世南北を襲名、文政十二年十一月二十七日、七十四歳で没した。

南北の作品の第一の特色は、理想を失った類靡期江戸町人の生活感情を見事に形象化する写実性である。それは義理人情相剋のモチーフによる丸本式の間描写や作劇法にとられず、勸善懲惡の秩序づけや合理化を加えようとしない大胆な方法によって支えられている。第二の特色は奇想天外な趣向である。実際はそれが趣向倒れに陥っていることも少くないが、ここで彼は、舞台機構・道具・衣裳・髪その他あらゆる面で、歌舞伎界がこれまでに開拓して来た演出技術の可能性を自在に駆使する。早替りはその意味で当時の歌舞伎のエネルギのめざましい現われであった。

代表作は「天竺徳兵衛韓嬪」(文化元年)・「心謎解色糸」(同七年)・「謎帯一寸徳兵衛」(同八年)・「隅田川花御所染」(同十一年)・「浮世柄比翼稲妻」(文政六年)・「東海道四谷怪談」(同八年)および本作などで、尾上松助・五世松本幸四郎・五世岩井半四郎・三世尾上菊五郎・七世市川団十郎らのために書かれ、それぞれの芸質の長所を十分に発揮させるものであった。

## 二

「お染久松色読販」は文化十年(一八一三)三月七日より、江戸森田座で上演され、好評により四月にも続演された。五世半四郎にお染(娘)・久松(若衆)・竹川(奥女中)・お六(伝法な悪婆)・貞昌(尼姿の後家)・お光(久松の許嫁)・お作(百姓の女房)の七役を早替りで演じさせることを主眼とし、通称「お染の七役」として名高い。

梗概。序幕(二七〇頁) 千葉の家臣石津久之進はお家の重宝吉光の刀を盗まれた越度で切腹、その子久松は乳母の悴の百姓久作に弟として引取られ、刀の詮議のため、質屋をしている瓦町の油屋に丁稚奉公し、油屋の娘お染と深い仲になる。刀の盗み人鈴木弥忠太は遊里の女お糸に入揚げ、もと若党であった鬼門の喜兵衛をして刀と折紙とを油屋に質入れさせるが、その金は喜兵衛に着服されてしまう。番頭善六は、お糸に惚れている油屋の息子多三郎をそのかして折紙を持出させ、多三郎を追出し、お染と夫婦になって油屋の身代を継ごうとするが、そのたくらみを丁稚久太郎に知られたので金を与えて久太郎を逐電させ、折紙を久作の荷の嫁菜の苞に隠す。それが原因の誤解から、久作は油屋下男九介に殴られ、油屋の縁者松本屋佐四郎の仲裁で膏葉代と質流れの裕を貰う。この話を聞いた喜兵衛とお六の夫婦は、その裕と行倒れの死骸を種に油屋をゆすることを思いつく。中幕(二二一頁) 喜兵衛とお六は油屋に死骸を持ち込み、弟が油屋の者に殺された

言って金をゆするが、そこへ死んだはずの久作が現われた上に、お染の許婚  
 山家屋清兵衛のはからいで死人が蘇生するので、ゆすりそこなって帰る。死  
 人は鯉に当たった久太郎であった。その夜喜兵衛は油屋の蔵から吉光の刀を盗  
 み出すが、久松はこれを殺して刀を取返し、家出したお染の跡を追う。〔大切  
 (二六〇頁) 隅田堤で久松はお染に追付き、折紙も手に入つてめでたく幕と  
 なる。ここは常磐津「心中翌の噂」で半四郎と団十郎の所作事が中心とな  
 る。執筆分担は序幕・中幕が南北、大切は二世桜田治助であった。〕

お染久松の恋愛譚は歌舞伎狂言「心中鬼門角(宝永七年)以来たび  
 たび劇化された。主なものに「お染 袂の白紋」(正徳元年)・「染模様妹  
 背門松」(明和四年)・「新版歌祭文」(安永九年)などの浄瑠璃がある。

これらを通して出来上ったお染久松劇の構成の骨子は次のようなも  
 のであった。すなわち、久松は武士の悴で油屋に奉公してお染と契  
 り、お染は五つ月の身重となるが、山家屋へ嫁入りの日が迫り、お  
 染の母はこれを苦慮している。久松の父または父に当る人物が久松  
 に意見し、種々奔走するが、結局久松は蔵の中、お染は蔵の外で自  
 害するというのである。このほか江戸の歌舞伎にも多くのお染久松  
 劇があり、南北はそれらの先行作品から多くの人物・趣向を撰取し  
 ている。しかし本作は先行作品の書替えではなく、まったく南北流  
 に換骨奪胎された翻案ともいべきものである。

南北は、義理のための悲恋や自己犠牲という旧来の主題とは全く

解 説



「お染久松色脱販」初演当時の錦絵 軽雲亭国九画 (日比谷図書館蔵)

別の主題を持込んでいる。それは驚嘆すべき早替りの魅力と、喜兵衛・お六を中心とする江戸前の悪の魅力である。たとえば油屋奥座敷の場は母貞昌の苦衷を描くためにあるのではなく、「肝が潰れて見物するもしんどい」「役者繁栄話」ほどの、きわどい早替りを見せるのが目的であった。序幕幕明きの精細を極めたトガキの列は、早替りへの異常な熱意をまざまざと感じさせる。彼の作品の中でもこれほど徹底した早替り劇は他に例がない。そのためたしかに趣向主義の弊に陥り、戯曲としての力強さを失っている。しかしその反面、歌舞伎の持つ場面本位のスペクタクル演劇としての魅力と可能性とが、最大限に發揮されているのである。また鬼門の喜兵衛は、封建的義理人情の枠を越えてただ現実の生の欲望に徹するという、南北の創造した生世話の悪人の典型であり、土手のお六は悪婆(五二二頁参照)という類廃期歌舞伎を代表する役柄の人物であるが、この二人を中心とする煙草屋の場と油屋の強請場とは、早替りの興味には乏しい代りに劇的密度の高いすぐれた場面となった。ことに前者には「この人常に棺桶を狂言に使ふ事を好み」(伝奇作書)と言われた南北の特色が濃厚である。

このように本作は短編ながら南北の特色を發揮し、「伝奇作書」の言うように「四谷怪談」とともに「古今の当り」を取った。以来頻繁に上演されて今日に至っているが、天保末年までの再演のみを次に掲げておく。

- |           |         |          |                               |
|-----------|---------|----------|-------------------------------|
| 文化十年六月    | 名古屋若宮芝居 | 外題不詳     | (七役)半四郎。(喜兵衛・佐四郎・法印)幸四郎。      |
| 文政二年三月―四月 | 江戸玉川座   | お染久松色読販  | (七役)半四郎。(喜兵衛・佐四郎)幸四郎。         |
| 文政三年十月    | 大坂中の芝居  | お染久松色読販  | (七役)半四郎。(喜兵衛・佐四郎・館壳)幸四郎。      |
| 文政四年十一月   | 京都南側芝居  | 外題不詳     | (七役)半四郎。(幸四郎一座するも役不詳)。        |
| 文政五年春     | 名古屋橋町芝居 | 外題不詳     | (七役)半四郎。                      |
| 文政十年四月―五月 | 江戸中村座   | 補お染久松色読販 | (七役)半四郎。(喜兵衛・佐四郎)幸四郎。         |
| 天保四年十一月   | 京、南側芝居  | お染久松色読販  | (七役)岩井紫若―後の七世半四郎。(喜兵衛)浅尾与六。   |
| 天保六年二月    | 大坂中の芝居  | お染久松色読販  | (七役)紫若。(喜兵衛)片岡市藏。             |
| 天保十年四月    | 大坂大西芝居  | お染久松色読販  | (お染・久松・竹川・四つ竹亀・おみつ・ふれ太夫・お作)市川 |

森之助。(お六)嵐徳三郎。(喜兵衛)片岡市蔵。  
なお現行の常磐津「初恋千種の濡事」は本作の大切浄瑠璃「心中翌の噂」の改作である。

### 三

底本は阪急学園池田文庫所蔵の三冊本。書卸し台帳の写本で半紙本一頁十三行、一冊目序幕・二冊目中幕が同一人の筆、三冊目大切は別筆であるが、序幕煙草屋の場に南北自筆の貼紙書入れがある(二二一頁注二参照)。本作の絵入根本は天保二年「於染久松色読販」の題で刊行され、「大南北全集」第六巻および「日本戯曲全集」第十二巻に翻刻されている。他に河竹繁俊氏校訂「鶴屋南北集(昭和二十三年、地平社刊)所収の「お染久松色読販」(以下「河竹本」と略称)がある。根本・河竹本と底本とはセリフ・トガキはもとより登場人物にもかなりの異同があるが、特に重要な相違を示すこと、および底本の理解に資することを主眼として、適宜頭注または補注にその異同を記した。

### 小袖會我薊色縫

#### 一

河竹黙阿弥(二八一六一—一八九三)の作者期間は、江戸末期から明治の中葉まで約六十年に及び、歌舞伎作者としては、坪内逍遙のいわゆる「最後の最大の集大成者」であった。

江戸日本橋の商家に生れ、のち芝に移ったが、芝居好きから五世鶴屋南北に入門、天保六年二十歳、勝蔭蔵の名で市村座に出勤、同十二年柴晋輔、翌年斯波晋輔と改め、同十四年二世河竹新七を襲名、以後、明治十四年隠退披露に当って古河黙阿弥と改めるまで、この名を用いた。新七襲名と同時に立作者の位置を得たが、実権はまだ三世桜田治助にあった。この修

業・雌伏の時代を第一期とすれば、安政元年から慶応二年に至る十年間は、四世市川小团次との提携時代で、第二期に当る。「薫紅葉宇都谷峠」(座頭殺し)・「網模様燈籠菊桐」(小猿七之助)・「小袖會我薊色縫」(十六夜清心)・「三人吉三廓初買」(八幡祭小望月)・「縮屋新助」・「勧善懲惡惡觀機関」(村井長庵)・「會我綉俠御所染」(御所の五郎蔵)など小团次主演のもののほか、「青砥棉花紅彩画」(弁天小僧)・「処女甄浮名横櫛」(切られお富)など白浪物が多いが、いわゆる生世話の傑作の多くはこの期に書かれた。

明治に入つての第三期には、九世市川团十郎・五世尾上菊五郎らのために、「梅雨小袖昔八丈」(髮結新三)・「太鼓音智勇三略」(酒井の太鼓)・「増補桃山譚」(地震加藤)・「黄門記童幼講釈」(天衣紛上野初花) (河内山と直侍)・「土蜘蛛」(極附極隨長兵衛)・「島衛月白浪」などを書いたが、この期には史実尊重の活歴史物、明治の新風俗を示す散切物、能衆・狂言の移植による松羽目物が現われ、時代の交転に処して新分野開拓を旨と努力が見られる。六十六歳で引退後の第四期にも、「新血屋舖月雨暈」(魚屋宗五郎)・「茨木」・「北条九代名家功」(高時)・「船弁慶」・「水天宮利生深川」(筆屋幸兵衛)・「四千両小判梅葉」・「盲長屋梅加賀鷲」(紅葉狩)と書き続け、明治二十六年一月歌舞伎座の「奴厮廓春風」を絶筆として、同月二十二日七八歳で没した。

生涯の著作三百六十種に上り、取材範囲の多様で豊富なこと、脚本構成の巧みなこと、趣向の案出に妙を得たことは拔群だが、もっとも顕著な特色は、流暢に歌い上げた音楽的なセリフに見られる。

## 二

「小袖會我薊色縫」は、安政六年(一八五九)二月五日より市村座で上演された、新七四十四歳の作で、名題が示すように江戸歌舞伎伝統の會我狂言である。

享保期以降、江戸の各座の正月はかならず會我狂言を上演する慣習が生じ、すでに顔見世狂言の伝統にも終止符が打たれた江戸末期に、なおも會我狂言の方は存続していた。會我狂言も、当初は全体を四番続きとし、三月に三番目、四月に四番

目を追加する形で、同じ名題を六月まで続けるのを原則としたが、毎年のことではさすがに趣向の種も尽き、會我的続き狂言として上演されて来た「助六」「鏡山」「清玄桜姫」「梅の由兵衛」などが次第に独立し、寛政期には二番目も別名題を建てるに至り、會我は「鬼王貧家」や「対面」など、ほんの一・二幕に追いつめられた。

この作も、一番目大詰に本筋と全然関係のない「対面」の場を設けたこと、江戸の地名を当て込んではいるが、場面は鎌倉付近と箱根山に限ったこと、鬼王女房月小夜の妹いづな十六夜の名を用いたことなどで、會我狂言の面影を止めている。

さて本作の題材は、文化二年六月小塚原で処刑された鬼坊主清吉を扱った講釈種だが、もっと直接には、安政二年野州無宿の富藏と共謀して將軍家の御金藏を破り四千両を盗み出したが、捕われて同四年五月、同じ小塚原で処刑になった藤岡藤十郎を、大寺正兵衛に当てている。このため、大当りであったが三十五日間で上演を禁止された。しかし、黙阿弥は晩年の明治十八年に至り、「四千両小判梅葉」と題し、別にこの一件を脚色している。

梗概。第一番目(三立目)(二七四頁)浪人八重垣紋三は、稻毛の家臣妻木逸之進の娘お雪の危難を救ったのを、大江の家老蔭山武太夫に認められ、その推挙で大江家に召抱えられる。(四立目)(三〇七頁)女犯の罪で追放になった極楽寺の役僧清心は、廓を抜けて来た扇屋十六夜と稻瀬川へ投身したが死にきれず、悪心さざして、十六夜の弟と知らず寺小姓せうせう求女を殺し金を奪う。十六夜は俳諧師白蓮はくれんの白魚船に救われる。(五立目)(三三六頁)紋三が武太夫の娘お柳と婚礼の夜、紋三を恋したお雪は自殺する。紋三は武太夫からお家押領おせりやうの陰謀加担を迫られ、遂に武太夫を殺して立退く。鬼薙清吉となった清心は、大江家の重宝緑丸の短刀を盗む。(五立目返し)(三六六頁)十六夜は白蓮の妾となったが、清心の菩提のため尼となり旅に出る。(大詰)(三九四頁)武太夫の一子繁之丞は、緑丸の盜賊として父の仇紋三を追跡し、箱根山中で出会うが、立廻りの間に谷底へ落ちる。ここで十六夜は清吉に出会う。第二番目(序幕)(四一四頁)一年後、女房の十六夜おさよと連立って白蓮を強請やうせうに来た清吉は、白蓮が盜賊大寺正兵衛で、幼時に別れた兄と知るが、捕手がかかる。(二幕目)(四四三頁)おさよは清吉と共に、箱根で生んだ赤子を抱いて、父西心が墓守をする無縁寺に逃れる。清吉は、悪の手始めに殺した求女がおさよの弟で、盗んだ短刀のため親の主筋の紋三が切腹したと知り、前非を悔いて腹を切る。おさよも死ぬ。正兵衛は早桶に隠れて逃れて来たが、遂に捕手に囲まれる。



黙阿弥が、右の荒筋を手際よくまとめた「語り」(看板や番付の大名題の上に記す)を次に掲げる。

奉掛宝前に、木太刀の類は八重垣何某、工を忍ぶ陸山が、手練を望の恋聲に、思ひは残るお雪が位牌へ、お柳が譲るあの世の盃、結ぶ妻木の逸の進は、老の一因に子ゆへの闇、廓を抜し心中も、誰白魚の四つ手網、かかりやつながる求女殺し、まだ前髪に行先は、賽の川原の石地蔵に、敵紋三と繁之丞が、忠孝二つの白刃と白刃、修羅の街や地獄谷、鬼の女房に気まぐれな、坊主がへりの十六夜おさよ、科の次第を清吉が、身を捨札に書残し、千人塚の腹切に、孫には迷ふ西心が、後世の菩提を塔十郎は、隠し目附の下男、大小さすが大寺正兵衛、三千両の盗人も、妻のお藤が貞節に、悪心忽ひるがへし、善人栄へる合巻仕組、古き趣向をはぎ合せ、仕立直せし春着の新物

「小袖會我」の小袖は、出牢した清心に十六夜から贈られた小袖に宛る(三二五・三二〇頁参照)。各幕の執筆分担は底本の裏表紙に記されているが、三立目(竹柴諺藏・竹柴濤治・五立目(篠田瑛助)・同返しの前半(竹柴瓢助)以外は新七が書いている。先ず四立目に道行浄瑠璃場を置き、主人公達を心中させる構想が面白い。この清元「十六夜」は今も流行曲であり、初代花柳寿輔の振付で、もっとも頻繁に上演されている。船中での白蓮と船頭との会話の運びの巧さ、元の百本杭の場で清心と求女の割りゼリフに始まる七五調の快さなど、作者の長所を遺憾なく發揮している。大話箱根山中の紋三と繁之丞の出会い、「鞆当」の型であるが、この場に使った下座の独吟「箱根の富士笠」が残っているのに、両者の名ゼリフが埋れているのは惜しい。この後の、時代から世話に変わる「だんまり」は、百本杭の幕切れ前の「世話だんまり」と共に「だんまり」劇の好見本である。二番目序幕の強請場は生世話の見せ場の一であり、南北の強請場との対比が見られる。二幕目に近所で演奏する浄瑠璃に合わせたの演技を見せる余所事浄瑠璃の場があり、黙阿弥の技巧の一見本を示すが、勧善懲惡の結末をつけるための愁歎場とはいえ、かなり冗長である。作者がこの作に見せた幾つかの手法を、「富治三舛扇會我」(鑄掛松・慶応二年)や「善悪両面尻手柏」(和尚次郎・慶応三年)で繰返し用いているのは、作者の本作への自信を示すものであろう。

その後の上演は「黙阿弥全集」第三巻巻末興行年表に見えるが、八重垣紋三の關係の幕は省略されている。底本には、明治十五年一月大阪戎座上演の「薔梅唇比翼色縫」の際の改訂と思われる書入れや、貼紙がある。四立目と二番目二幕目に多